

随想

言コミは、永遠に不滅です！

松本青也

言語コミュニケーション学科の歴史は、1991年に始まります。この年に文学部の英文学科、国文学科のそれぞれに設置された言語文化コースが一緒になって「言語文化コース」が誕生しました。私がこの大学に赴任したのは翌1992年で、その次の年からこのコースの主任を務めることになりました。

当時のカリキュラムの内容は、英文学科の科目＋国文学科の科目－文学＋文化という感じで、面白そうな科目が並び、言葉や文化が好きな学生が集まりました。そして2000年に新しくコミュニケーション学部が誕生することになり、その中の「言語コミュニケーション学科」として生まれ変わるようになったのです。

新しい学科を作るにあたって考えたことは、言葉が好きな若者を集めて、思う存分言語コミュニケーションが楽しめる学科にしようということでした。そこで、外国語としては英語以外に、今後ますます存在感を増すに違いない中国語を加えました。更に私たちの母語に誇りを持ち、世界に広めたいという思いから、外国人への日本語教育も展開したいと考えました。そこで、学科の中に、言語教育を考える応用言語学コースに加えて、英語、中国語、日本語の3コースを設定したのです。

教員については、大学レベルの外国語は母語話者に教えてもらうのが一番ということで、私以外は、すべてネイティブスピーカーを揃えることでした。英語ではモルデン先生・マギー先生ご夫妻、中国語では馮先生・杜先生ご夫妻、それに日本語では山内先生が当時から熱心に学生を指導してくれました。そのおかげで、言語コミュニケーション学科は、ほとんど常に学内でトップの成績を収め続け、先日発表された本年度4年生の学科ごとの累計GPAでも、言コミが全学の中でトップでした。そしてもちろん社会に出てからも、めざましい活躍をする素晴らしい人材を多数輩出してきたのです。

大学全体の事情から、言語コミュニケーション学科は他学部の多元文化専攻、フィールドスタディコースと一緒に、2010年に新しく「交流文化学部」が誕生しましたが、言コミの教育理念は、そのままこの新学部を受け継がれています。科目もほとんど同じものが継続しており、学内で初めてだった学科単位での研究大会開催という伝統も、来年度に予定されている交流文化学会研究大会として、そのまま受け継がれようとしています。

私としては、皆さんを最後のコミュニケーション学部長として迎え、新しい交流文化学部長として卒業を見届けることになります。皆さんを最後の卒業生として、本年度で幕を閉じることになった言語コミュニケーション学科は、愛知淑徳大学の歴史の中で、ひときわ輝く学科であったと、いつまでも語り継がれることでしょう。皆さんは、その言コミで学んだことを誇りに思ってください。我らが言コミは、永遠に不滅です！

日本語コミュニケーションコースは、あなたも日本語のエキスパート、世界へ向かってGO！というコピーのもと、日本語コースは、日本語のスペシャリストを育てるところです、このコースで、思いっきり日本語の世界に触れて、日本人として日本語を新しく再発見をして見ませんか、とスタッフからの一言、そして、この日本語コースは、そのように国語を苦手とする人にも十分興味を持てるようになっていきます、もちろん国語の得意な人にとっても、まったく新しい視点から日本語や文化の分野で学びますので、いろいろなメニューをこなしながら視野がどんどん広がっていきようになっていきます、とスタートした。

カリキュラムは、1年生向けの必須科目として、「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」「日本語論Ⅰ・Ⅱ」を提供、2年から始まるコース専門科目は、「日本語表現演習Ⅰ～Ⅳ」「日本語学Ⅰ・Ⅱ」「日本語・日本文化講読Ⅰ・Ⅱ」「日本語特殊講義Ⅰ・Ⅱ」に加えて、「日本語教授法Ⅰ～Ⅲ」「日本語史・日本語教育史Ⅰ・Ⅱ」を配し、日本語教育科目「日本語教育実習」また「海外研修」を行った。「日本語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ」を履修して、「プロジェクト」を学修の総仕上げとして行った。

科目の特色について、次のような問答をHPに用意していた。思い出に少し再録をしてみよう。

わああ、大学でも作文表現があるのですか。—— そう、作文は一生修行ですね。リテラシーそしてドキュメンテーションとって、これは語や文の用法、そして目的に応じた文書作りを学習することです。作文のひとつの目的、自分の考えと意思を相手に伝える、正しく伝えて分かってほしいという、欲求にもとづきますし、将来の論文作成と必要に応じた文章作成に役立ちます。大学生です、もっとブラッシュアップ。

これまでの科目の「国語」とはちがうのですか。—— そうですね、いいところに気がつきましたよ。ことばとしては同じですよ。毎日使っている、よく知っている国語は、すなわち日本語です。でも、言ってみれば、英語は英国で、アメリカ英語はアメリカ合衆国で、仏語はフランスで、と、簡単に考えてみても、国や地域の言語として、わたしたちはことばを見ているですね。これも外国語としての日本語と同じく、外国語としての英語であったり仏語であったりしているのですよ。

その国の人には「国語」であったとしても。すると、“外国語教育”ですか、日本語も。—— ですから、日本語というときは、よく知っている国語を、きっと成績優秀の皆さんの国語も、考えてみれば外国の人とコミュニケーションをするための日本語なんだ、と、そのように考えて、語学の知識を学習します。外国語教育の語学に必要なもの、まず、それが「日本語学」ですよ。そうそう、これからの時代は、わたしたちにコミュニケーション日本語が大切になりますよ。国語や文化に関心があればいいですよ。

日本語コミュニケーションコースでは、2000年から2013年までおよそ80数名の卒業生がいる。日本語教育の教師、学校教育の教員、そして企業では、銀行、広告会社、出版社、貿易業など、活躍をしている。最後に皆さんを送り出し、ここに、卒業生の活躍と健康を祈ります。

光陰矢のごとしと言われてるように、時間が経つのはほんとうに速いなど実感させられている今の気持ちです。

振り返ってみれば、言語コミュニケーション学科を作る当初、学科長である松本青也先生をはじめ、私たち教員全員が学科の特徴、学科の魅力を最大限に出すために、いろいろと工夫をしました。特にカリキュラムの編成に力を注ぎ、優秀な学生を育てるためには、どんな科目を設ければよいかを徹底的にディスカッションを行いました。大変なときもありましたが、その過程はとても楽しく、懐かしかったです。その成果として、10年間優秀な学生をたくさん養成することができて、今社会の各分野で活躍しています。CAになった学生もいれば、警察官や、一流企業としてトヨタ自動車や郵船航空などで働いている卒業生もいます。もちろん、結婚して専業主婦として立派に子育てに専念している卒業生もいます。その卒業生たちから、近況報告のメールが届くたびに、この上もない喜びと幸せを感じられます。その度に、教員という仕事はどんなに幸せな仕事なのかを実感させられます。

言語コミュニケーション学科では、中国語コミュニケーションコースがあるので、ゼロからのスタートで、どれだけ社会で通用する優秀な中国語の人材を送り出せるかに頭を悩まされました。一番頭の痛い問題は、1. 学生に学びやすい教材、レベルの高い教材、学生の興味に合う内容になっている教材はなかなかないことと、2. 限られている授業の時間だけでなく、授業以外の時間でもどれだけ効率よく学生に勉強してもらえるか、という2つのことでした。悩んだ結果、得られた結論は自分で教材を作ることとメディア教材を開発することにするしかないということでした。それからは、時間との闘いが始まりました。二人の教員で、十何教科もの教材を作成しなければならないだけでなく、メディア教材の開発にとっても時間がかかりました。最初は時間を一杯費やしたにもかかわらず、学生が喜んで使おうとしない失敗作ばかりでしたが、学科ができて4年目に、やっと学生たちに喜んで使ってもらえるメディア教材ができました。当時の喜びは今でも覚えております。

今年で、言語コミュニケーション学科は最後の年になりますので、とても寂しいです。と同時にこの学科に誇りをずっと持っています。皆さんもきつこの学科に来てよかったと思ってくれるだろうと信じております。

The Past and the Future: Thoughts on the Language Communication Department

Jennifer McGee

When I first came to Japan and became part of the Language Communication Department, I was incredibly nervous, because I'd never lived in another culture or worked in another language. Fortunately, I was also very lucky, because the Language Communication department was an ideal place to work for so many reasons.

One reason, of course, was the students. I was always so impressed with the students we had--how energetic they were, how curious about the world, and how friendly and helpful. We spent a lot of time politely correcting each others' mistakes--theirs in English and mine in Japanese--and I learned vividly that making mistakes is the only way to move forward with a language, or with your life.

Teaching seminar became one of the most valuable experiences in my life. In the United States, we have no class like a seminar--something that lasts for three years with the same teacher and students. So it was an amazing experience for me, to really commit to the same students for three whole years. I learned so much about teaching and about Japan, and it was wonderful to have a chance to form strong bonds with my students that continue after the class ends. Every year at graduation, I always find myself wanting to cry and hug everyone, which is not exactly an appropriate response in Japan! But my students have always been very patient with me, both on graduation day and elsewhere. They've enhanced my life so much and I only can hope I've touched their lives a little bit as much as they've touched mine.

Another wonderful thing about the Language Communication department was the teachers. We came from all over the world--Japan, the U.S., China, England, Australia--and often there were cultural differences in how we approached work and teaching. But everyone was such a good model of intercultural communication--patient and curious and interested in other peoples' cultures and lives. I felt like I've learned so much about communication and culture just from working with them.

And maybe the keystone of the department was Dr. Matsumoto. I can't even describe how much I feel like I owe him--he was always patient with my mistakes and careful to try and help me. I suspect he often helped me without my even noticing it. It was his open-mindedness, curiosity about the world, and ability to adapt to different cultures and ways of doing things that set the tone for the whole department and made it possible for us to attract the wonderful students we had. My gratitude and respect for him is boundless.

I'm so happy that I'm still in touch with so many of our alumni, because I can see how they're making the world a better and more open place with their ideas and behavior. I like to think that in some small way, the Language Communication department created a decades' worth of students who are eager to learn about the world and different cultures, ready to embrace change while understanding tradition, and in general are brave and wise members of society. I think in the long run, the department's influence will go on, and I thank all of you for making it possible.

On Being Home

Dan Molden

When I came to Japan more than 13 years ago, I had very little idea what I was going to be doing. I had visited Nagoya once and visited the Aichi Shukutoku campus, but the Faculty of Communication and the Department of Language Communication (言語コミュニケーション学科) did not even exist yet! Professor Matsumoto had described to me a vision for a department that would teach communication in a variety of languages to students who were interested in learning about language and communication and culture. The teachers would almost all be native speakers of the languages they were teaching in. The students would be those students who wanted to be challenged in that kind of setting. They would be you.

Together, the teachers in Language Communication designed a curriculum for the new department, but we did not know what sort of students we would attract and how we would work together.

Now, 13 years later, we know the answer. The Department of Language Communication was able to attract some of the best, brightest and nicest students in the area. Each and every one of you has been a pleasure and a privilege to teach. Even when I am tired or unhappy, the students always made it worth my time and effort to come to class or office hours or the school festival.

In a very real way, Language Communication became my home. It was a place to study and work and also to play and have fun. From the first Encounter Camp at the Shukuyukan in Takayama to the All-year Reunion held this January, my time at Shukutoku has been more than just work. I enjoy seeing each of you go out into the larger world and I hope you find a place as comforting and welcoming as the one you have left.

Of course, we have a saying in English that says, "you can never go home again." In general, this means that once you leave a place, your experiences, your connections go with you and you cannot find them in the place. It is very similar to the ancient Greek saying that "you can not step in the same river twice." In this way, I suppose that each year the department closes and then is opened anew. When you graduate, you don't leave Language Communication, but rather you take a little bit of it with you. While the name will be removed from the sign in front of the campus, Language Communication lives on in each and every person who studied, taught or worked in the department.

We have another saying in English that says, "home is where the heart is."

My heart is in Language Communication. And you are always welcome in my home.

言語コミュニケーション学科は、2000年4月に開設されました。それから12年の歳月が経ちました。その間、計3000名ほど優秀な卒業生を社会に送り出して今日に至りました。

2000年、本学科の設立当初、松本青白先生を中心にして、私たち教員一同は、どのようにすればグローバル化が急速に進んで、いる社会のニーズに対応でき、尚且つ社会で活躍してもらえる優秀な学生を育てることができるかを真剣に考え、議論に議論を重ねて、カリキュラムの編成に取り組みました。

幸い、私たちの努力と願いは無駄にならず、2004年度に初めて卒業生を社会に送り出して以来、毎年優秀な学生を数多く社会に送り出すことができました。その卒業生たちは、現在、CAとして活躍している人もいれば、グランドスタッフとして活躍している人もいます。また帝国ホテルやヒルトンホテル、キャッスルホテルなどホテルで、活躍している人もいれば、JTB、名鉄観光など旅行会社で活躍している人もいます。さらに、市役所などの公務員及び警察官として活躍している学生もいれば、トヨタ自動車、トヨタ紡織などの生産メーカーや日本郵船航空、日本通運などの物流業界で活躍している人もいます。このように、数多くの優秀な卒業生を送り出すことができたことを私たち教員一同は心から誇りに思っています。

また、中国語専攻の学生は、中国語の学習がゼロからスタートしたにもかかわらず、2010年度の卒業生で8級(TOEICスコア800以上に相当)を取った学生は3名で、9級(TOEICスコア900以上に相当)を取った学生は3名でした。また同じ2010年度の卒業生で中国語専攻の学生の全員がHSK(漢語水平考試)4級以上を取ることができました。さらに、今年の中国語コミュニケーションコースの卒業生では、9割ほど卒論免除の資格を獲得することができました。

以上のように、本学科では着実な成果を挙げてきましたが、間もなく幕を閉じることとなりますので、とても寂しいです。と同時に優秀な学生をたくさん育てることができる誇りを感じられます。みなさんどうか、この学科の卒業生であることを誇りに思って活躍してください。

Reflections

Justin Charlebois

It was really nice seeing so many alumni and current students at the final *Genkomi* event. I was overcome by an overwhelming sense of pride and satisfaction to have had the privilege to work with so many talented students and colleagues. *Genkomi* alumni are making unique contributions to society and are a positive reflection of this department.

Matsumoto Sensei made some thought-provoking remarks at the final event that succinctly captured the heart and soul of the department. I would like to add my own thoughts and reflections on this topic.

After residing in Japan for over ten years and studying about the culture, I feel as though I have gained some perspective about both Japanese and U.S. American cultures. In fact, I believe that my position as an expatriate enables me to objectively view and appreciate aspects of both cultures. One of the consequences of living in and adapting to a foreign culture is that one begins to question the customs and beliefs that are normative in his or her own culture. In my case, I have come to the realization that some American customs and beliefs that I once regarded as “normal” are regarded differently in Japanese culture. A strikingly obvious example is the custom of tipping, but there are also much deeper elements of one’s own culture that would be regarded as “abnormal” in another culture.

In class, I continually conveyed how many of the assumptions that we hold about language and social interaction are strongly influenced by our own cultural background. These customs and beliefs form the basis of our own “cultural lens” through which we interpret our daily experiences. The challenge for those of us aspiring to acquire true intercultural competence is to question the assumptions we once regarded as normal and remain open to other people and ways of life. I believe that the *Genkomi* faculty has exerted considerable effort to instill intercultural awareness in our students, and the alumni are a positive reflection of our efforts. I hope that we can all continue to cultivate our intercultural competence in an increasingly global society.

I will always look back on my time as a member of the *Genkomi* faculty with great fondness. The faculty and students were able to bond through both curricular and extracurricular events such as encounter camp, *zemi gasshuku*, and our annual conference. Although *genkomi* will soon cease to exist, the spirit of the department lives on in the *kouryubunka* department.